

高等学校における地歴連携のエクスカージョンの試み

竹澤史也*¹・高林拓也*²

1. はじめに

今回のエクスカージョンは、2018年9月22日に、中等社会科教育学会・授業実践研究部会第17回例会において実践したものである。本例会のテーマは「授業におけるフィールドワークのあり方」となっている。このテーマにもとづき、白山・茗荷谷地域を事例としてエクスカージョンを試みた。白山・茗荷谷地域を選択した理由は、報告者（案内人）の勤務校である筑波大学附属高等学校の高校生を念頭において計画したためである。また、生徒にとって「身近なもの・日常的に目にしているもの」から学習を開始するという点も重視しており、その点においても「白山・茗荷谷地域を学ぶ」という意味合いを含んでいる。

まず準備段階において、「授業におけるフィールドワークのあり方」の検討から始めた。地理においては、中高でのエクスカージョンとそれに類する学習、大学のゼミなどでエクスカージョンを主催した報告者の経験などを活かして、エクスカージョン資料（以下、パンフレット）を作成した。

地理Aでは「生活圏の地理的な諸課題と地域調査」の内容において、居住・都市問題、防災、地図の活用を含めて、『お国じまん』と称した居住地を紹介するポスター作成を高校1年生の冬期課題¹⁾としている。これはまず「地域を学ぶ」ことに重点を置いている。次いで「地域から学ぶ」ことをめざしている。ここで

いう「地域から学ぶ」とは、『お国じまん』で居住地を学習する方法を理解したうえで、他地域での学習の際に応用できることを意味している。この冬期課題や今回のエクスカージョンは、2022年度に必修化される「地理総合」の「生活圏の調査と地域の展望」でも活用できると考えている。

歴史においては、『地域と戦争・軍事』をテーマとした高校2年生の日本史A夏期課題²⁾の記述にもとづき検討した。夏期課題の生徒の記述からは、「地域を学んだ」ことは読み取れるが、「地域から学んだ」ことはほとんど読み取れない。そこで、普段の授業で学んでいる内容と地域にあるモノを繋げる学びの実現のためのエクスカージョンを検討しなければならない。

「地域から、教科書で学ぶ日本の歴史をみる」学びに加えて、2022年度から必修化される「歴史総合」を見据えて、「近現代の歴史の大きな変化（近代化、国際秩序の変化や大衆化、グローバル化）」についても学ぶことができるようパンフレットを作成した。

2. エクスカージョンの概要

今回のエクスカージョンは、前述した通り2018年9月22日に実践したものである。本来は7月28日に実施される予定だったが、台風12号接近に伴い順延した経緯がある。エクスカージョンへの参加者は一部分のみの参加も含めて23名である。はじめに約1時

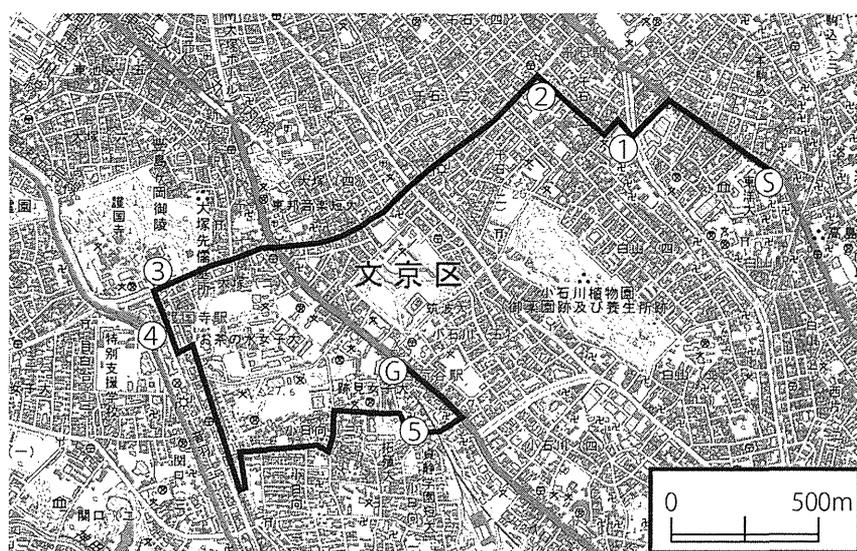


図1 エクスカージョンのルートマップ
(電子地形図25000平成30年調製より作成)

*¹ 筑波大学附属高等学校非常勤講師、*² 筑波大学附属高等学校非常勤講師

間の報告を東洋大学内で行った。ここでは、エクスカーションの目的や概要、実施への思いなどを報告した。つぎに約3時間のエクスカーションを実施した。今回のコースは、東洋大学白山キャンパスをスタート(㉟)とし、①明化小学校(モダニズム建築)、②徳川マンション(一橋徳川家下屋敷跡)、③護国寺、④講談社、⑤地名発祥の地(大塚・茗荷谷)を各ポイントとしてまわり、茗荷谷駅をゴール(㉞)とした。またルート中では、①自然環境と人々の生活の関係性、②交通網(道路と地下鉄)と都市形成、という2点を考察した。

3. 準備段階における成果と課題

今回のエクスカーションでは、「1. はじめに」で述べた通り、高校生を念頭に実施したため、実際に生徒が用いる教材としてパンフレットを作成した。ここでは、パンフレット作成段階における成果と課題を述べる。パンフレットとは「エクスカーション中に必要となる地図・写真・図などをまとめた資料」のことで、これには、地形図や旧版地形図、絵図なども含めている。作成上の注意点として、野外で見る資料であるため、文章よりも地図や図を多く載せることを優先とした。また、現地で実物が見られる場合、その写真は使用しないが、過去の景観を表している写真は使用した。

地理の成果として、地理院地図の「自分で作る色別標高図」で作成したオリジナルの地図から、個別の坂だけでなく地形の概観や周辺環境も考察できるような内容を作成できたことが挙げられる。加えて、新旧地形図の比較から地域の変容を現地で考察する内容も作成できた。一方で、地図の掲載について課題が残った。現行の地形図に関しては、コピーなどではなくズームを適宜変えた地理院地図で対応できる。しかし、旧版地形図は謄本交付を受けた白黒の地図をコピーしたため、パンフレットに載せたとき、地図が荒くなり読図が難しくなってしまう。また、地形図は慣れていないと机上で集中して読図するのに時間も時間がかかってしまう。地形図に慣れていない生徒が野外で読図するには、印をつけたり文字を見やすくしたりするなどの適切な注釈や加工が必要である。しかし今回は、その点に配慮していなかった。

歴史の成果として、過去の文学作品などの歴史に関わるものと、地形や自然環境などの地理に関わるものを関連させながらパンフレットを作成できたことが挙げられる。一方で、コースに合わせてパンフレットを作成したため、ポイントごとに扱う年代が異なってしまった。パンフレットのページをルート順にすべきか、時系列にすべきか、再考の余地がある。

4. エクスカーションの様子

今回のエクスカーションは、報告者(案内人)を先

頭にルートに沿ってポイントをまわり、そこで説明するというスタイルをとった。以下、紙幅の関係上、エクスカーションの内容を一部分取りだして記すこととする。

写真1は、ルート中の猫又坂(ポイント②と③の間)にある旧河川の橋梁を見て、周辺の地形についての説明を参加者が受けている様子である。旧河川の橋梁から、かつてこの付近に川が流れていたことがわかり、地形の形成について考察することができる。

図2の「産業」では、筑波大学附属高等学校の生徒が日常的に目にしている講談社の建物(ポイント④)から、音羽通りで紙に関する産業が営まれていることの歴史的背景および過去の自然環境との関連を考察した。ここでは、「音羽通りの産業とその変化」を題材として、前述した①自然環境と人々の生活の関係性について、現地での説明を再現して記述する。

まず、明治後期の音羽通りの様子を描いた絵(図2の右ページ下部)と『東京名所図会・小石川区』の記述³⁾から、音羽通りではかつて紙漉きが盛んに行われていたことを読み取る。そのうえで、「なぜ音羽通りでは紙漉きが盛んに行われていたのか」という発問をした。この発問に加えて、江戸時代末期(1857年)の切絵図⁴⁾を参考に、音羽通りの裏通りを実際に歩い



写真1 猫又坂にある旧河川の橋梁の説明を聞く参加者
(2018年9月22日 須賀忠芳撮影)



図2 実際に使用したパンフレット
(地形のページと産業のページ)



写真2 ルート最大の勾配をもつ八幡坂を登る参加者
(2018年9月22日 須賀忠芳撮影)

た。その結果、かつては音羽川が流れていたということに気づき、きれいな水を必要とする紙漉きと地形との関係性を理解することができた。また景観から、音羽川が現在暗渠となっていることも補足説明した。

次に、紙漉きが徐々に衰退し、印刷・出版業に変化していった理由や背景を説明した。紙漉きが衰退した理由として、音羽川の水質が都市化の影響で悪化したことや洋紙需要の高まりによる和紙需要の減少を説明した。印刷・出版業が盛んになった理由としては、和紙生産からの連続性に加えて、東京帝国大学（現東京大学）を核とする本郷および神田の後背地であることによる書籍・雑誌の需要の高さ、旧小石川地区の低廉な地価について説明した。

音羽通りに続いて、今回のルートで最大の勾配をもつ八幡坂（ポイント④と⑤の間、勾配は地理院地図により168.3%と計測）を登った。写真2は参加者が文京区の地形を肌で感じている様子である。

なお、前述した地理Aの夏期課題『お国じまん』において、「文京区は坂のまちである」というまとめが多くみられた。これを参考に今回のエクスカーションでは、9個の坂を歩き、加えて少なくとも4個の坂を見ることができるルートを設定した。

5. エクスカーション実施後の成果と課題

エクスカーション実施後の成果と課題を地理と歴史にわけて述べる。まず地理の成果は、今回のエクスカーションで扱った内容や視点を他地域でも応用できることである。例えば、交差点上に立ち、「この景観からどんなことがわかるか」という漠然とした発問と「車線数と行先をふまえてこの道路の意味合いを考えよう」という具体的な発問を重ねた。これら景観という漠然とした視点や、車線数・行先といった具体的な視点を活かした発問は、文京区のみならず他地域での地形や交通を理解することに活用できる。

一方で課題もある。実際のエクスカーションでは音羽川の暗渠において、報告者（案内者）が「ここは暗渠であるがその根拠を探してみよう」という発問をし

た。しかし、歩きながら「特徴的な事象は見られないか」「においが感じられるか」などの五感を活用した発問から、参加者自身が「ここは暗渠である」と気付く方が適していたのではないかと考える。

また参加者からは、他地域での応用を考えると、発問や説明のフレーズをさらに検討していく必要がある、との指摘があった。地表に関して例えば、「平坦な」「急峻な」「台地の縁には」「はるか遠くに」といったフレーズの活用である。これらフレーズを組み入れた発問を検討する余地がある。

歴史の成果は、エクスカーションの中における発問を通じて、参加者が「地域から、教科書で学ぶ日本の歴史へと視野を拓ける」学びが実施できたことである。ただし、報告者（案内人）による誘導によって参加者が気づき考えるという学習になってしまったという側面もある。

一方、エクスカーションを通じて明らかとなった課題を2点挙げる。1点目は、パンフレット中に文字資料を多く使用したため、実際に歩いているのにもかかわらず、視線が下を向いてしまったことである。歩きながら景観を見る時間と資料を読むタイミングを区別するなどの対策を講じる必要がある。2点目は1点目と関連するが、作成したパンフレットの使用方法が曖昧になってしまったことである。具体的には、パンフレットにある「問い」や資料の読み取りを、エクスカーション中に取り組むのか、あるいは事前学習・事後学習なのか、あらかじめ明確に定めることができていなかった。このことより事前学習・事後学習を含め体系的にエクスカーションの学びを考えていく必要性を感じた。

6. おわりに

今回のエクスカーションには、現場の先生をはじめとして大学院生を含む23名が参加した。報告者（案内人）だけではなく、参加者からも多くの発言があり、参加者全員によって成立したエクスカーションであったといえる。このことをふまえ、高校生に実施することを想定すると、生徒のふとした気づきや何気ない一言が教員の想定していたものを超えて、エクスカーションをより豊かにしていくのではないだろうか。今回は文京区を事例として、地理と歴史が連携したエクスカーションを実施した。地歴連携のパンフレットを作成したことや、他地域での応用が可能な実践ができたことなどの成果があった。その一方で、ただ関連させるだけではなく、地理と歴史の双方にとって学ぶ意味のある内容かどうか、より一層考えていかなければならないことにも気付かされた。

最後に、今回のエクスカーションでは、安全面や時間調整・トイレ休憩などのエクスカーションを実施するうえでの現実的な問題をあまり考慮していなかつ



写真3 護国寺を背景とした集合写真
(2018年9月22日 須賀忠芳提供)

た。前述した課題に加えてこれらの問題についてもコースの設定などをはじめとして検討していきたい。

本報告の作成にあたっては、1・2・3章および地理に関する記述は竹澤が執筆した。4・5・6章および歴史に関する記述は高林が執筆した。

註

- 1) 地理Aの冬期課題『お国じまん』では、特別の事情がない限り、居住地を対象としている。評価の視点として、①一次資料の活用、②地図のオリジナリティ、③フィールドワーク、④ポスターとしての魅力、の4点を設定している。また、自己評価・他己評価・教員による評価により点数化している。
- 2) 日本史Aの夏期課題『地域と戦争・軍事』では、事前に①地域設定、②設定意図、③調査対象の説明、④その遺

跡の意義、⑤保存・継承の手立て、この5点に言及するよう指導した。評価においても以上の5点の言及度合いや考察の深さを基準とした。

- 3) 宮尾しげを監修(1911):『東京名所図会・小石川区』、230ページの記述から、報告者(案内人)が作成した。
- 4) 日本地図選集刊行委員会、人文社編集部編(1995):『嘉永・慶応江戸切絵図』、70-71ページをもとに、報告者(案内人)が加筆修正した。